

4. 「大学院生による教育評価アンケート」全学的観点から見た現状と今後の課題

全体のアンケート結果の選択式設問では①「学位取得のための道筋が明確に示されている」が全体平均点が最も高く 4.6 となっている。続いて⑥「研究を進めていく上で、必要な指導教員が適切に配置されている」が 4.5 を示している。②「提示されたカリキュラムは納得のいくものである」が 4.4、④「提供される科目の授業内容が明確に示されている」が 4.2、⑤「個々の授業はシラバスに準拠して、適切に進められている」が 4.1、⑦「オフィスアワー等、大学院生活を送る上で、教員に相談できる制度が整っている」が同じく 4.1 である。これらの回答結果から、カリキュラムや授業内容、指導体制に関して、大学院生は比較的満足していることが明らかになった。

他方、③「授業時間割はバランスよく配置されている」の全体平均点は 3.5 で、設問の中では最低の数値となり、「2. どちらかと言えばそう思わない」と「1. そう思わない」が合計で 17.7%で、「3. どちらとも言えない」23.5%と合計すると 40%を超える。⑩「キャリア形成に関して、適切な指導、相談が行われている」は 3.6 で、昨年度の 3.3 と比較して、0.3 ポイント上昇しており、「2. どちらかと言えばそう思わない」と「1. そう思わない」は 0%であり、改善されてはきているが、「3. どちらとも言えない」は 50%を超えている。

自由記述については、「良かった点」として、指導が丁寧で、個別での対応が行き届いている、先生に相談しやすいなど、指導体制が整っていることがあげられている。「改善すべき点」として、大学のメールサーバが通常とは異なり不調で研究者とのやりとりに支障があったことや、図書館の閉館が多く、論文作成に不便であったなど、学習環境面の問題と、授業が週のうち集中する日があることや、夏季集中講座のスケジュールが厳しかったことなどの授業時間割のバランスの問題、教育関連の実習では雑務が多く負担が大きいなど、実習の内容の問題などが記載されていた。

授業時間割の配置のバランスと、キャリア形成に関する指導、学習環境の整備に改善の余地があることが明らかになった。2014 年度および 2015 年度のアンケート結果では、研究のための図書・関連資料の不備が課題であったため全学的に改善策を議論し実行してきた結果、本年度は昨年度と比較して 1.1 ポイント上昇しており、大幅に改善されてきていると考えられる。授業時間のバランスに関しては、昨年度と同じような結果が出ており遺憾である。キャリア形成に関しては、昨年度と比較して満足度が上昇してはいるが、さらに改善を続ける必要がある。来年度も引き続き、大学全体、研究科内、専攻内で改善策を議論し、改善策を実行する必要がある。授業時間割のバランスを改善し、学びやすい環境を整え、修了後の進路についてより良い指導を行うことによって、本学の大学院教育の充実を図ってゆきたい。

文責：中里 郁子（人間文化学部 人間文化学科 FD 委員）